

当院回復期リハビリテーション 病棟としてできること

～昨年度の入院患者の結果をふまえて～

回復期リハビリテーション病棟

理学療法士 岩田 賢治

看護師 谷口 健吾

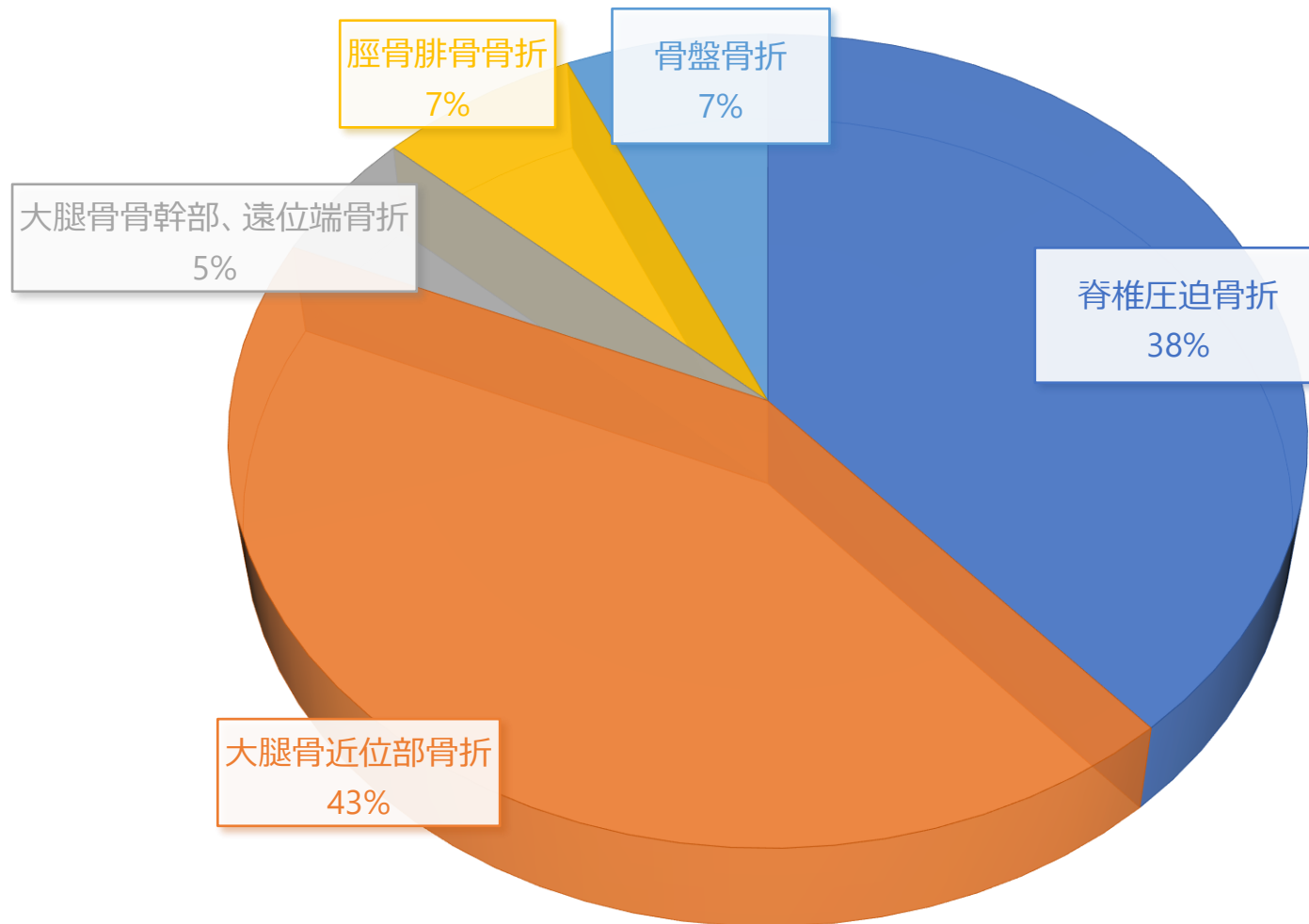
本日の内容

- 昨年度の回復期病棟における骨折患者の現状
- 当院回復期病棟としてできること

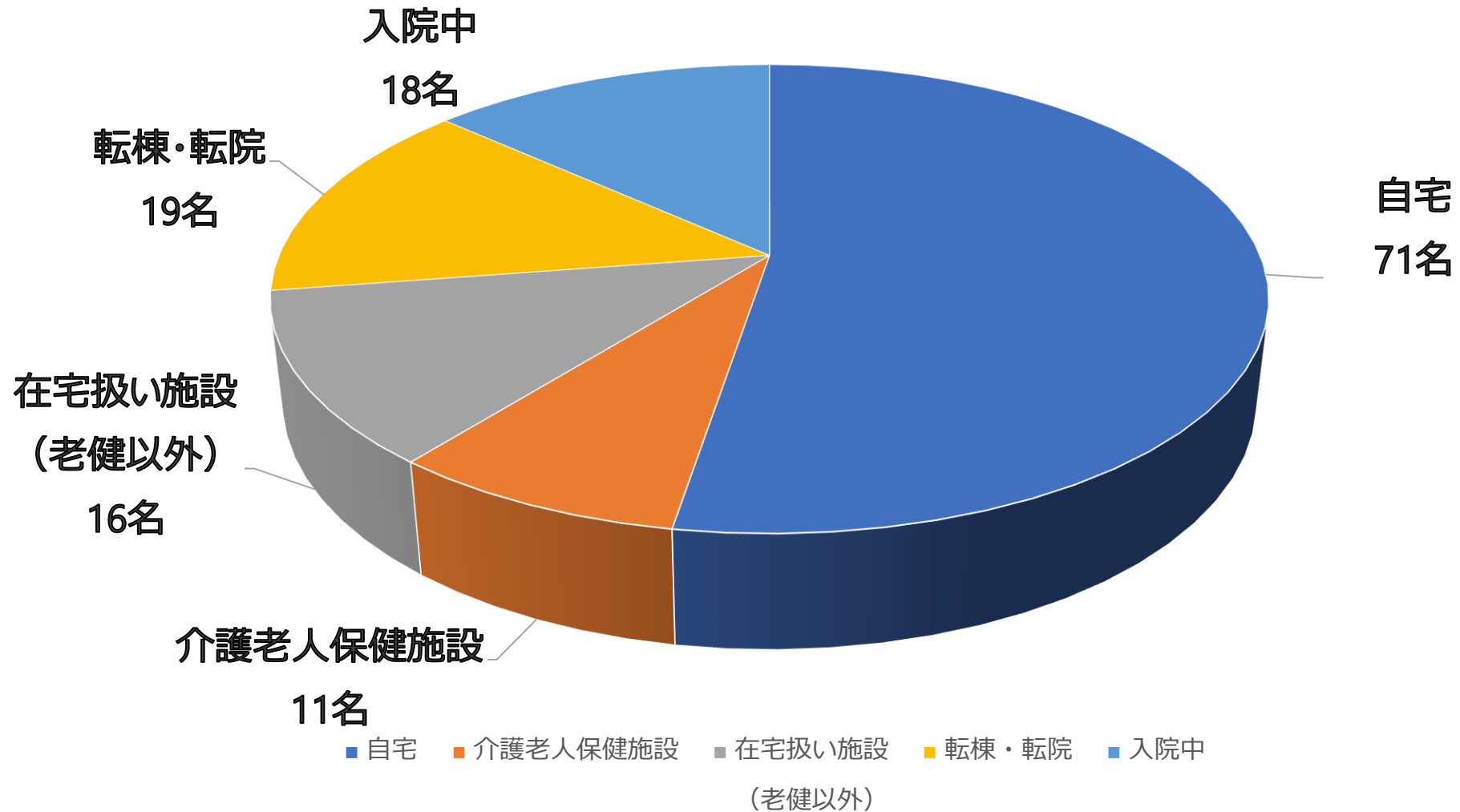
昨年度の骨折患者（2019.4～2020.3）

- 患者数：135名（転倒による骨折患者に限る）／138名
➡（1年間のうちに、転倒による再骨折で再入院患者6名／135名あり）
- 平均年齢：男性；82歳（22／135名）女性；84.3歳（113／135名）
- 疾患名：脊椎圧迫骨折、大腿骨近位部（頸部・転子部）骨折、
大腿骨骨幹部骨折、大腿骨遠位端骨折、脛骨近位端骨折、
脛骨腓骨骨折、骨盤骨折……
- 退院先内訳：自宅；71名 介護老人保健施設；11名
在宅扱い施設（老健以外）；16名
転棟・転院；19名
入院中；18名

疾患別内訳（2019.4～2020.3）

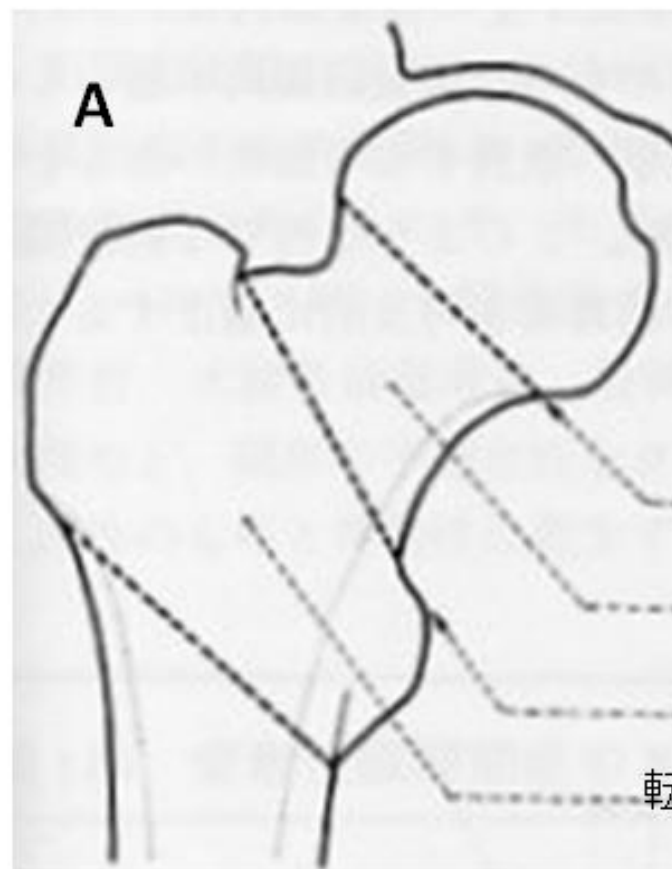


退院先内訳 (2019.4～2020.3)



大腿骨近位部骨折とは？

- ・大腿骨頸部骨折
- ・大腿骨転子部骨折



頸部骨折の発生部位

転子部骨折の発生部位

大腿骨頸部骨折の治療法

- 保存療法

- 手術療法

非転位型骨折) Hansson pin
screw固定



(Hansson pin)

(人工骨頭)

転位型骨折) (60歳未満の場合) 骨接合術 (非転位型骨折と同様)
(80歳以上の場合) 人工骨頭・人工関節置換術

大腿骨転子部骨折の治療法

- 保存療法

- 手術療法

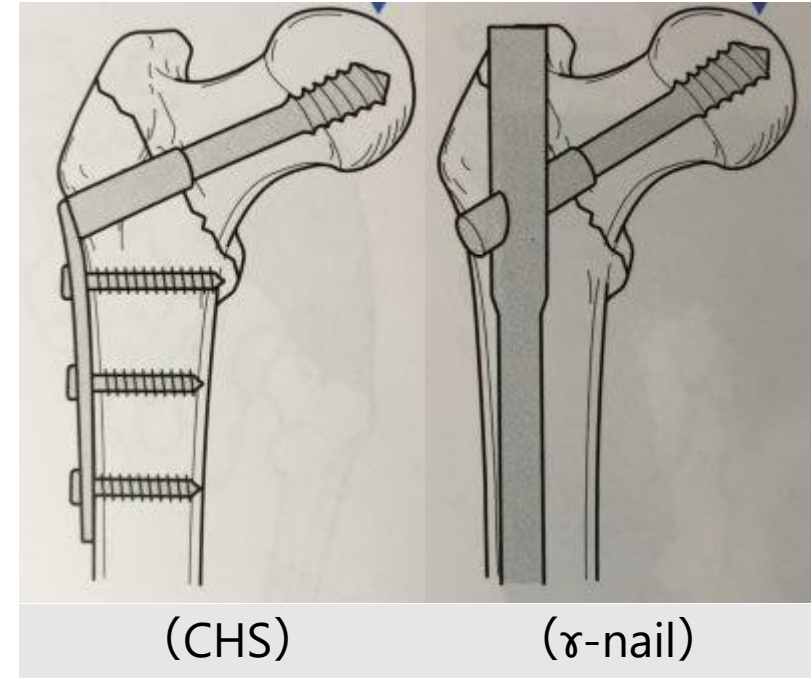
安定型) ・intramedullary Gamma nail (γ-nail)

- compression hip screw (CHS)

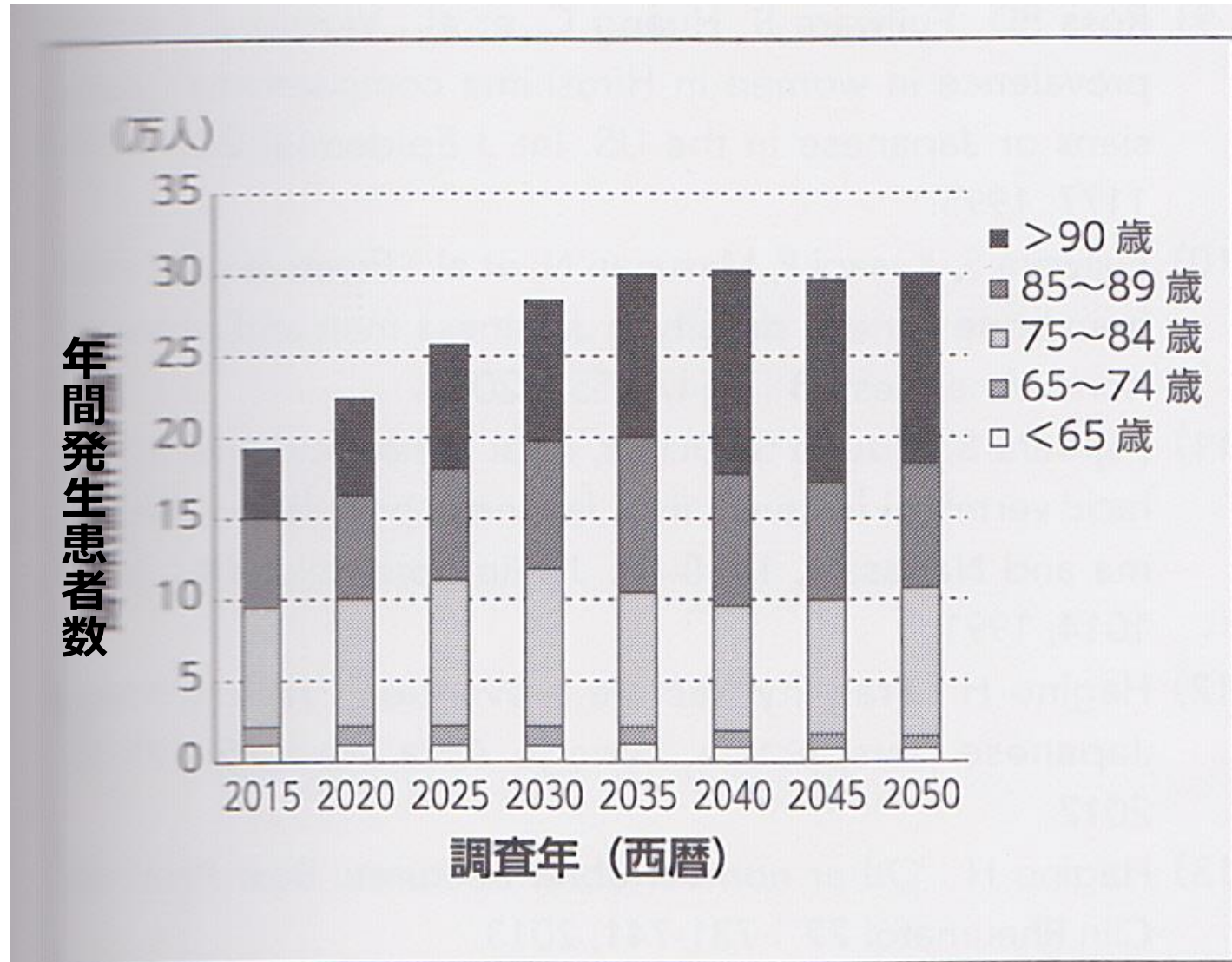
➡こちらの方が手術をより速くかつ安全に行うことができる。

非安定型) ・intramedullary Gamma nail (γ-nail)

➡第一選択として用いられる。



大腿骨近位部骨折患者数の将来予測



大腿骨近位部骨折後の生命予後

- 同年齢の一般人と比べて、術後一定期間の死亡率の上昇があり、**1年以内の死亡率は10～30%とされている。**
- 手術が生命予後に影響を及ぼす期間については報告がまちまちであるが、**1～2年とするものが多い。**

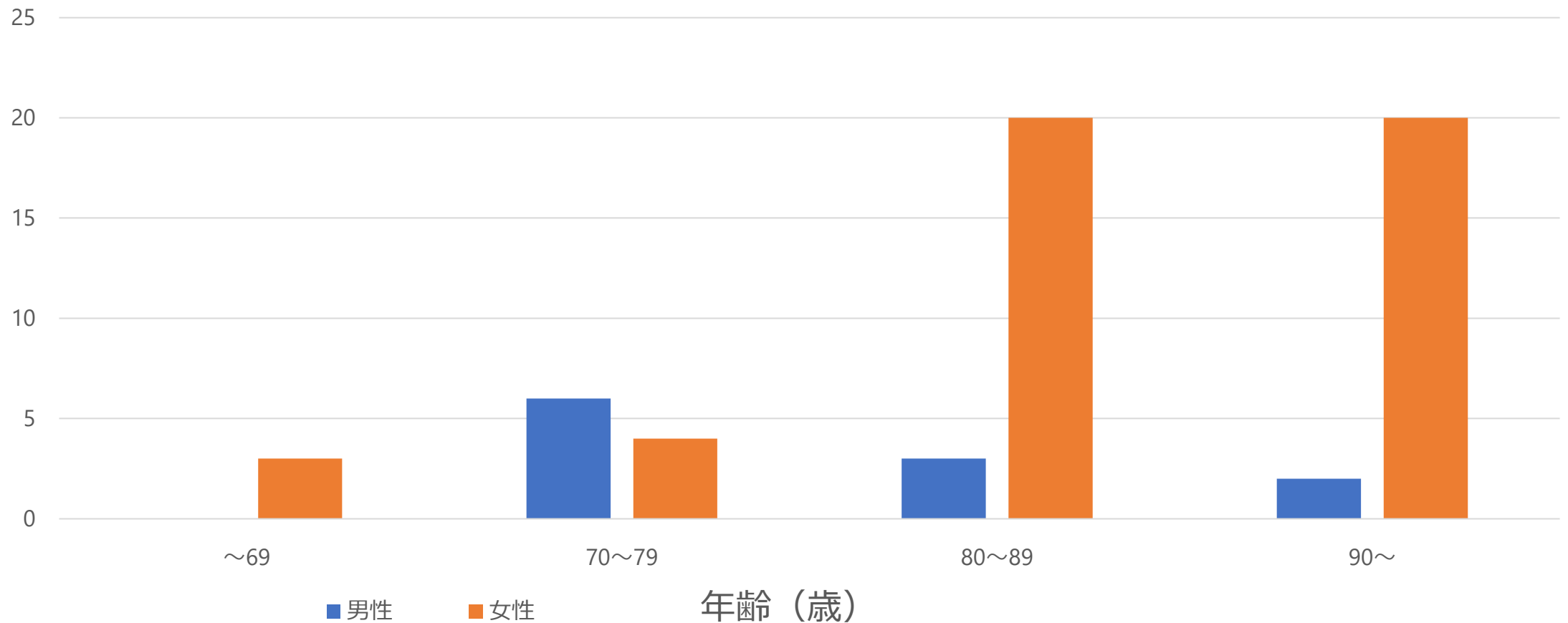
大腿骨近位部骨折の生命予後に関連する因子

- 術後全身状態（悪いほど不良）
- 年齢（高齢ほど不良）
- 性別（男性の方が不良）
- 術式（人工骨頭置換術が骨接合術より不良）
- 手術時期（遅延すると不良）
- 歩行能力（低い者ほど不良）
- 悪性腫瘍歴（有する方が不良）
- 合併症（有する方が不良）
- 認知症（有する方が不良）

当院の大腿骨近位部骨折患者 (2019.4～2020.3)

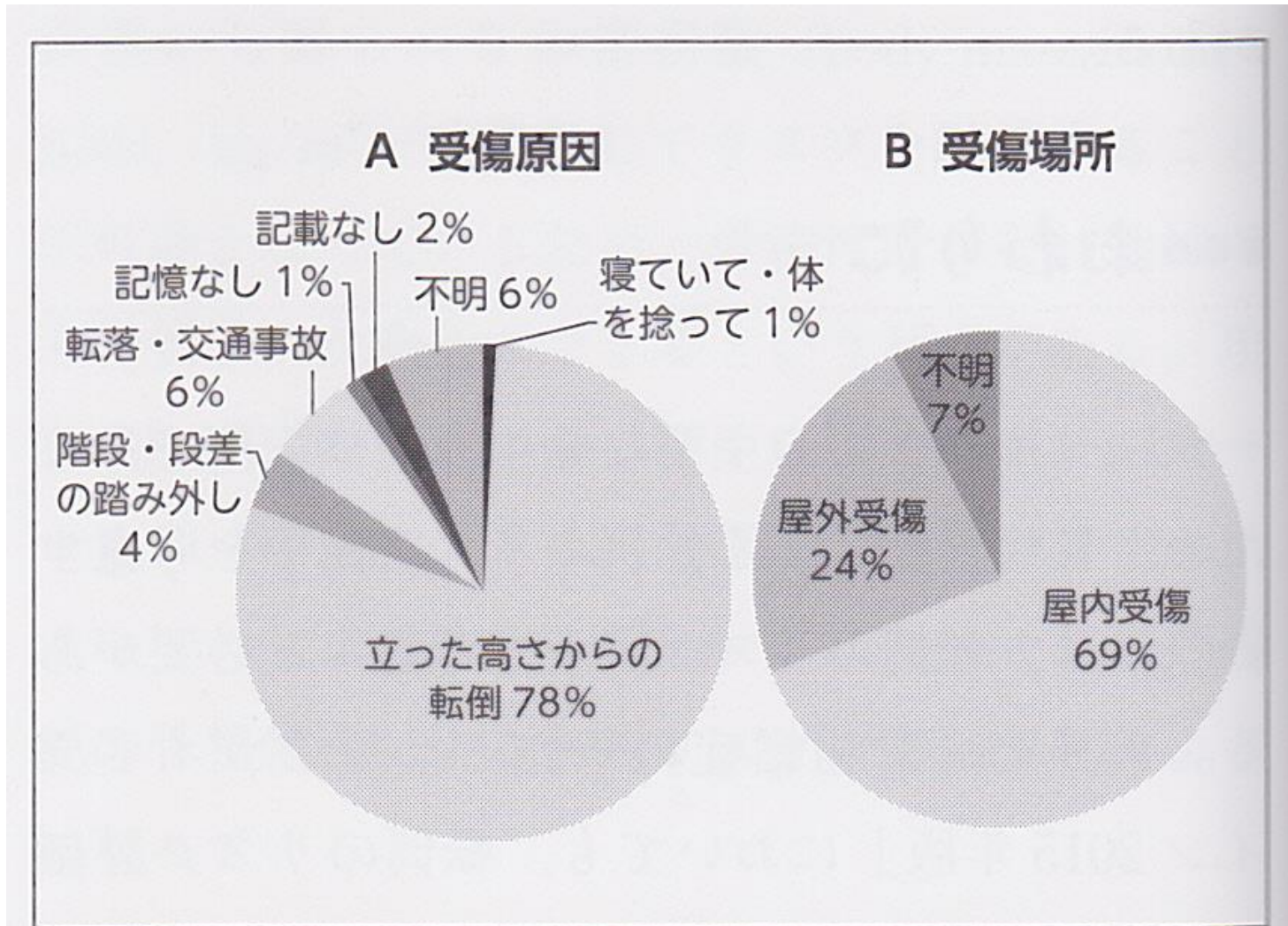
- 患者数：58名（男性：10名 女性：48名）
- 平均年齢：男性；80.1歳 女性；85.9歳
- 平均FIM利得（運動項目に限る）：19.9

年齢別大腿骨近位部骨折の受傷件数

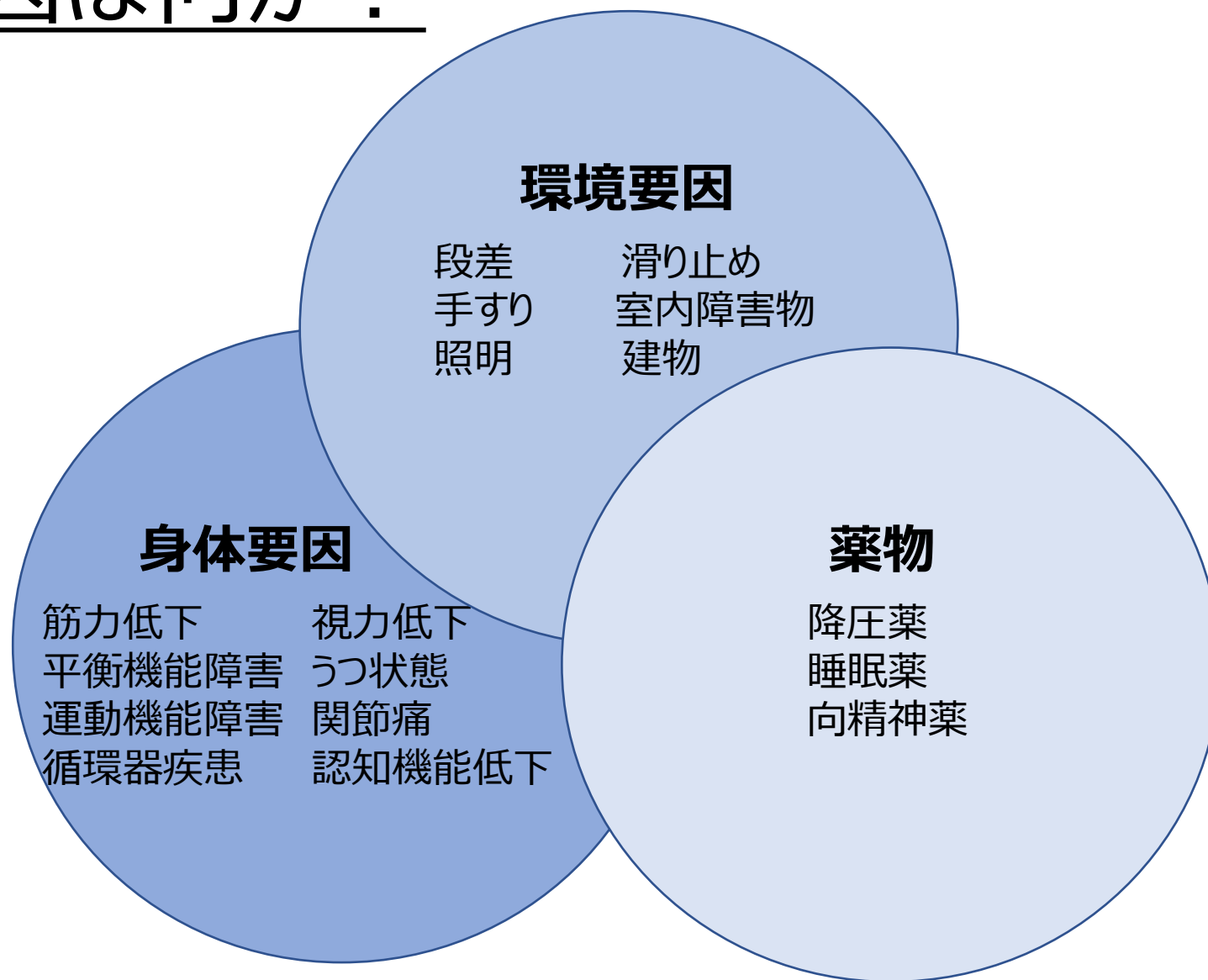


当院大腿骨近位部骨折患者の
受傷機転は
すべて『**転倒**』によるもの

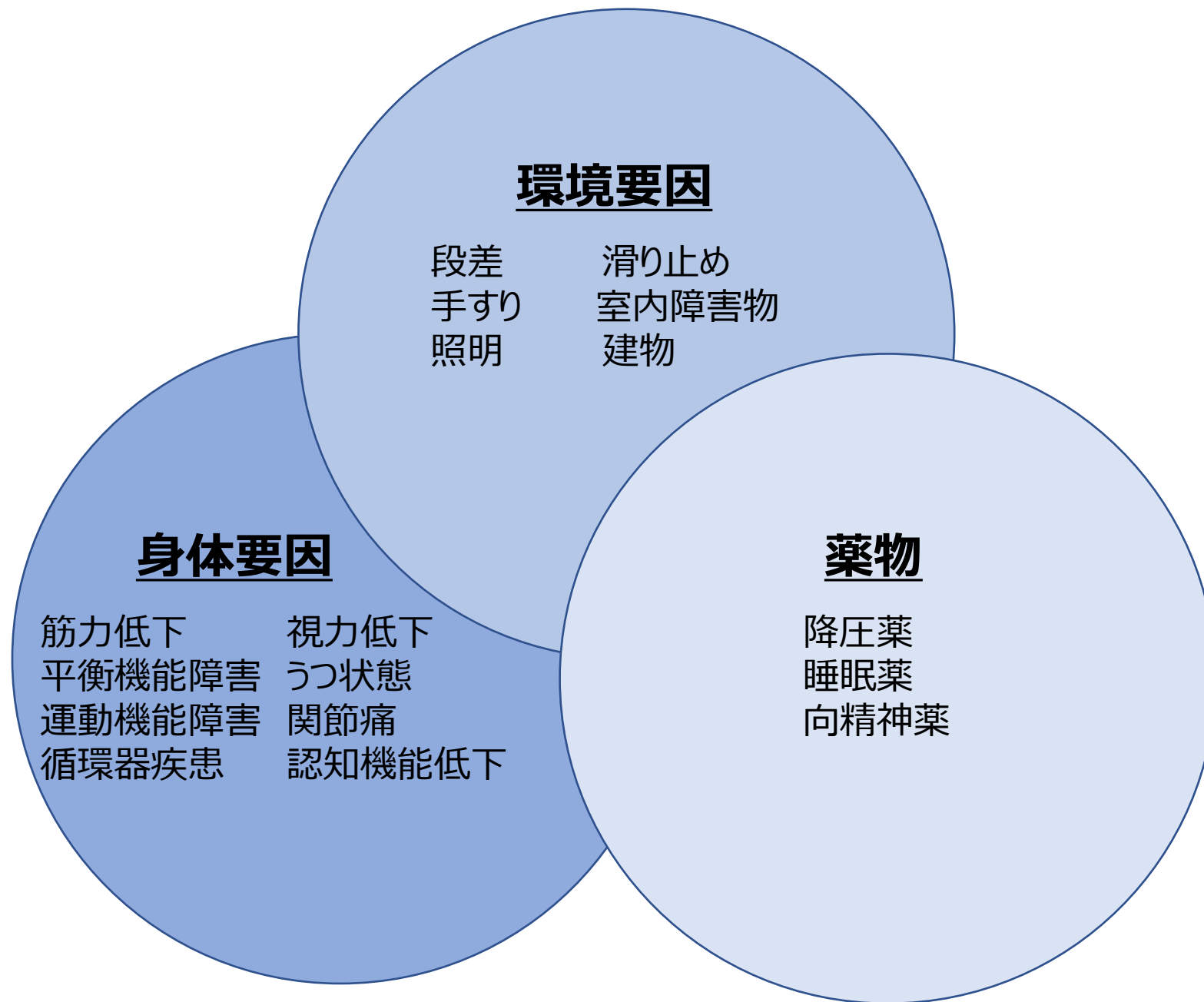
大腿骨近位部骨折の受傷原因と受傷場所



転倒の要因は何か？



当院入院中にできることは何か？



転倒の要因について、解決できるものは解決していくこと！！！！

対策①

身体要因

筋力低下 視力低下
平衡機能障害 うつ状態
運動機能障害 関節痛
循環器疾患 認知機能低下

下線部については、PT・OT・STの介入にて、対応できる可能性がある。

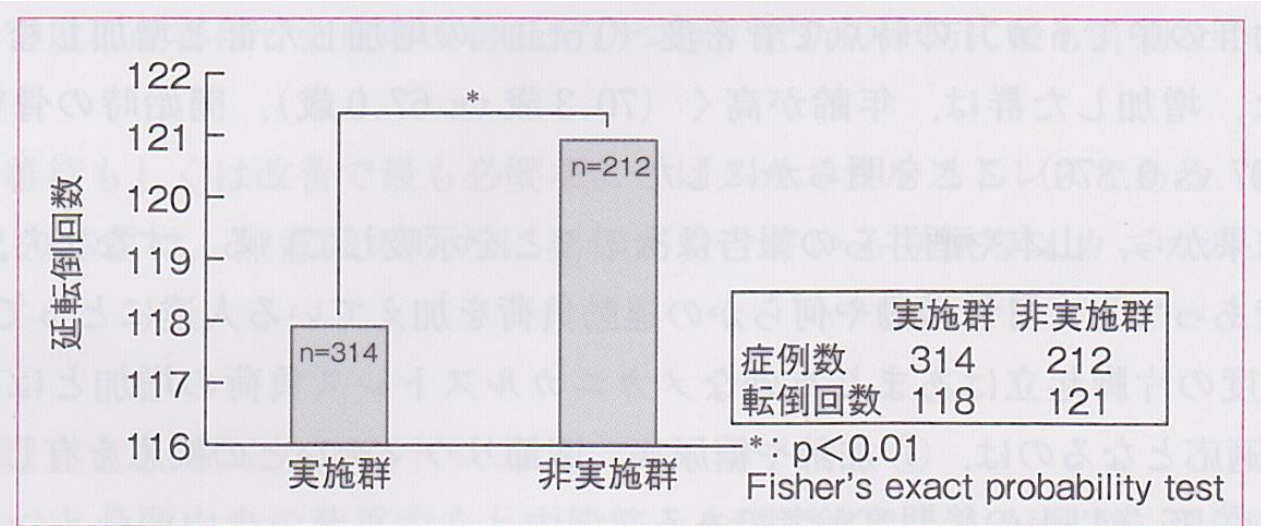


図1 開眼片足起立運動訓練と転倒（文献9より引用改変）

転倒予防に最も効果的な運動は、動的な運動よりも片足で立った静的バランス運動である。

対策②



- ・多職種協働により、入院中の各患者の行動を細かく観察しながら、環境設定を行う。
- ・退院時には、その環境設定を家族・施設スタッフ等に明確に伝達する。

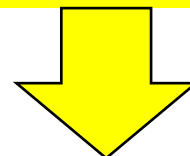
対策③



入院中に多く見られる睡眠障害

睡眠障害の症候：不眠、過眠、睡眠スケジュールのずれ、睡眠中に起こる異常な精神的・身体的現象など

対策)
看護師・看護補助者による患者の訴えを聞き取り、行動観察をする。
生活リズムを整える。



それを踏まえて、用法・用量については、主治医と相談する。

当院回復期リハビリテーション病棟の取り組み

- セルフリハグループ：空いた時間を利用して、患者の運動習慣を定着させる。
- 転倒転落グループ：インシデント事例から、最善の環境設定を立案する。

最後に・・・

- いったん骨折が生じた後の再骨折リスクが高く、骨折後の1年間に骨粗鬆症の薬物治療が一度でも行われた患者の割合は2割程度に過ぎないと考えられている。
- 当院も多職種連携によるリエゾンサービスを有効に活用し、地域住民の骨折発生率を低下させるための第一歩として、今年度からかかりつけ医に連絡票を送付することで継続した骨粗鬆症治療が行われることが望まれる。